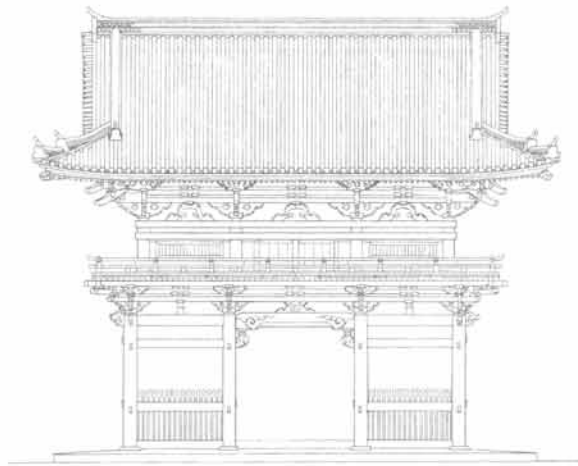


(財)和歌山県文化財センター年報

2000



財団法人 和歌山県文化財センター



1. 徳蔵地区遺跡縄文時代中期全景（北西から）



2. 藤倉城跡（川関遺跡）全景（西から）



3. 東照宮唐門（竣工）



4. 粉河寺大門の塗装状況

目 次

巻頭図版

1. 徳蔵地区遺跡縄文時代中期全景（北西から）
2. 藤倉城跡（川関遺跡）全景（西から）
3. 東照宮唐門（竣工）
4. 粉河寺大門の塗装状況

平成12年度（財）和歌山県文化財センター受託事業一覧	2
受託事業所在地	3

埋蔵文化財／発掘調査

紀伊国分寺（南門跡）の発掘調査	4
荒田遺跡の第6次発掘調査	5
山口遺跡の第4次発掘調査	6
西庄遺跡の第6次発掘調査	7
川辺遺跡の第2次発掘調査	8
徳蔵地区遺跡の第4次発掘調査	10
藤倉城跡（川関遺跡）の第2次発掘調査	14
宇田森遺跡の確認調査	16

文化財建造物／保存修理

重要文化財 粉河寺大門保存修理の設計監理	17
重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟保存修理の設計監理	18
旧中筋家住宅未指定建造物（人力車庫）調査	20
重要文化財 和歌浦東照宮保存修理の設計監理	21
湯浅町伝統的町屋調査業務	22

関連研究

西日本最古の埋葬—徳蔵地区遺跡—	23
縄文時代後期の埋葬群	24
徳蔵地区遺跡発掘調査現場の普及活動	25
粉河寺大門の塗装について	26
湯浅の町屋について	28
橋本における町家の編年指標について（3）	30

調査概報

窪・萩原遺跡（梓田荘）の発掘調査	32
------------------	----

海外研修報告

海外研修報告 中国	36
-----------	----

（財）和歌山県文化財センター 平成12年度概要	38
-------------------------	----

平成12年度 (財)和歌山県文化財センター受託事業一覧

埋蔵文化財調査事業

	事業の名称	所在地	契約期間	面積	委託機関
1	紀ノ川流域下水道伊都浄化センター建設用地内所在遺跡第6次発掘調査(窪・萩原遺跡)	伊都郡かつらぎ町	12.12.1~13.2.23	336㎡	和歌山県伊都振興局建設部
2	史跡紀伊国分寺跡	那賀郡打田町	12.4.3~12.7.31	160㎡	打田町
3	県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う荒田遺跡第6次発掘調査	那賀郡岩出町	13.1.19~13.6.29	622㎡	和歌山県那賀振興局建設部
4	粉河加太線道路改良工事に伴う山口遺跡第4次発掘調査	和歌山市	12.12.19~13.3.31	420㎡	和歌山県海草振興局建設部
5	和歌山貝塚線道路改良工事に伴う川辺遺跡第2次発掘調査	和歌山市	12.3.9~13.3.27	2,740㎡	和歌山県海草振興局建設部
6	宇田森遺跡確認調査	和歌山市	12.9.1~12.10.31	180㎡	財団法人和歌山県土地開発公社
7	県道西脇山口線道路改良工事に伴う西庄遺跡第5次発掘調査	和歌山市	11.7.9~12.5.31 11年度から繰越し	1,600㎡	和歌山県海草振興局建設部
8	西脇山口線道路改良事業に伴う西庄遺跡第6次発掘調査	和歌山市	12.4.27~12.8.30	130㎡	和歌山県海草振興局建設部
9	近畿自動車道松原那智勝浦線建設事業に伴う徳蔵地区遺跡第4次発掘調査	日高郡南部町 南部川村	12.4.3~13.3.31	13,148㎡	日本道路公団
10	那智勝浦道路建設に伴う藤倉城跡第2次発掘調査	東牟婁郡那智勝浦町	12.3.24~13.3.27	9,625㎡	国土交通省近畿地方整備局紀南工事事務所
11	尼ヶ辻・荒田遺跡出土遺物整理	那賀郡岩出町	12.6.1~13.3.31		和歌山県
12	西脇山口線道路改良事業に伴う西庄遺跡第3次出土遺物整理	和歌山市	12.5.29~13.3.31		和歌山県

文化財建造物保存修理設計監理等事業

	事業の名称	所在地	契約期間	棟数	委託機関
A	重要文化財 東照宮本殿他保存修理設計監理業務	和歌山市	12.4.1~12.9.30	7棟	宗教法人東照宮
B	重要文化財 粉河寺大門保存修理設計監理業務	那賀郡粉河町	12.4.1~13.3.31	1棟	宗教法人粉河寺
C	重要文化財 旧中筋家住宅保存修理設計監理業務	和歌山市	12.4.1~13.3.31	6棟	和歌山市
D	重要文化財 旧谷山家住宅外壁修繕設計監理業務	和歌山市	12.11.1~13.3.31	1棟	和歌山県
E	重要文化財 旧中筋家住宅保存修理業務	和歌山市	12.7.19~13.3.31	6棟	和歌山市
F	史跡紀伊国分寺跡本堂保存修理設計監理業務並びに修復事業	那賀郡打田町	12.4.3~12.12.28	1棟	打田町
G	旧医王院本堂保存修理設計監理業務並びに修復事業	那賀郡打田町	12.4.3~13.3.28	1棟	打田町
H	湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区保存対策調査業務	有田郡湯浅町	12.4.1~13.2.28		湯浅町
I	旧中筋家住宅未指定建造物調査業務	和歌山市	12.11.7~13.3.31	1棟	和歌山市



受託事業所在地

紀伊国分寺（南門跡）の発掘調査

史跡・紀伊国分寺跡は、那賀郡打田町東国分に所在する。地形的には紀ノ川の浸食作用によって形成された河岸段丘上の南端を占め、寺院は南面して造営されていた。今回は史跡整備に伴う南門復元資料を得ることを目的にして、南門推定地を中心に160㎡の範囲で発掘調査を行なった。調査前の状況としては、南北に参道・東西に里道が伸び、今回の調査区のほぼ中央で十字に交差していた。参道部より北西は旧大門池、北東及び南西・南東は旧水田で一段下がる地形であった。

今回の調査区は、全体的に現在の攪乱により遺構の遺存度が極めて悪く、比較的状况が良好だったのは、参道・里道下の極一部であった。主な検出遺構としては、中央北側参道下の瓦敷き遺構（写真下）、北西側の築地基部（写真上の左手前）、中央北側の池状落ち込み（写真上の左木陰）、西側中央部で南北方向に延びる池水排水溝、及び部分的に掘り下げた下層で検出した東西区画溝2条が挙げられる。その他は、近・現代にかけての水田耕作に係わるものと思われる。

瓦敷き遺構は、平瓦碎片のみを用い敷き詰めた様相を示すことから、南門基壇を削平してスロープ状の参道を造ったと考えられる。これに西接する池状落ち込み遺構は、前年度の調査でも確

認され、中門基壇を削平し且つ池の埋土から瓦器が出土した事から、鎌倉時代には池の造成がなされたと考えられる。

一部削平を逃れた築地基部付近からは、軒丸瓦が2点、軒平瓦が1点、直上層から土師器椀が出土したことから、平安時代中頃に築地の改築がなされたと考えられる。

その他、整地土及び攪乱からは、軒丸瓦5点、軒平瓦1点そして鬼瓦片が出土している。これらの南門付近から出土した瓦は、昭和48年度の調査でも指摘されているとおり、主要堂塔で用いられた瓦より一時期新しいもので、相対的に講堂の次段階の瓦、もしくは平安時代までの瓦が多数を占めていることを再確認した。

（立岡 和人）



調査区全景（西から）



拡張区②瓦敷き遺構

荒田遺跡の第6次発掘調査

調査経緯 荒田遺跡は紀ノ川下流北岸的那賀郡岩出町森周辺の標高34～39mを前後する河岸段丘上に位置する。平成8年度から10年度にかけて県道泉佐野岩出線の建設工事に伴う5次の調査が実施され、19区間・約8,700㎡の調査が実施されている。その結果、弥生時代の土器棺・柱穴・土坑・溝や中世の掘立柱建物・土坑・溝・井戸などが検出されている。

今回は荒田遺跡の南端部に位置し、現有の農免道路との取り付き部の622㎡を調査した。

上面の遺構 南西部を中心として、中世の細い溝を28条検出した。幅10～20cmで、深さ5～10cmほどである。ほぼ東西南北方向であり、現在の水田区画とも合致している。水田耕作の鋤溝だと考えられる。調査区の水田区画は東西方向に細長いのが、鋤溝も東西方向のものが多い。溝からは瓦器椀や土師器の皿の小破片が出土した。土坑は6基検出した。深さ10～20cmほどで、東西方向に細長いものが多い。埋土も溝と同様のもので、水田耕作に関連した遺構だと考えられる。南東部では東西方向に約40cmほどの段差で地形が下がり、湿地状になっている。

下面の遺構 下面では、中央部から東部で柱穴と楕円形状の土坑、西部で溝2条・自然流路1条を検出した。柱穴は直径15～30cm・深さ10～40cmほどである。溝S D101は北北西から南南東に延びる弥生時代後期の溝である。調査区の西端にあたり完掘していないため、規模は不明であるが、第3次調査で、北に延びる部分を確認しており、幅約2.0m・深さ0.6m前後である。弥生時代後期の甕と壺の破片が少量出土した。溝S D102は北北東から南南西に屈曲して延びる弥生時代後期の溝である。幅2.0～2.8m・深さ0.4～0.6mである。南部では溝S D101によって削平されており、これに先行する溝である。埋土から磨耗した弥生時代後期の壺・甕・高杯・鉢などがコンテナ5箱ほど出土した。土坑は長径2.0～5.0m・深さ0.2～0.5mで、楕円形状を呈する。出土遺物は皆無であった。自然流路S R101は幅約3.0mで北から南に深さを増して流れている。

層序から弥生時代後期より以前に形成された流路だと推定される。

今回の調査地点は検出した遺構や遺物から、弥生時代や中世の集落の中心部から南へ離れた場所だと考えられる。南端部では地形が一段低くなり、湿地状を呈している。

(黒石 哲夫)



下面遺構全景（北から）

山口遺跡の第4次発掘調査

本遺跡の調査は一昨年前から県道粉河加太線拡幅工事前事業として行なわれてきた。本年度はこれの両側の約420㎡を対象に実施した。調査区の呼称は3次調査の続きとして北側をF区、南側をG・H区とした。これらの区はいずれも狭小なため検出遺構の全容をとらえられなかった。

(F区の調査) 現況は民家の花壇となり、そのためトレンチ調査を行なわざるを得なかった。この区の堆積の状況は昨年度調査地(D区)と酷似し、いずれのトレンチも礫層であった。出土遺物はこの礫層上面で近世陶磁器が出土したのみにとどまった。

(G区の調査) 現況是水田であった。床土除去後中世の溝状遺構を2条、土坑状遺構1基を検出した。溝状遺構は深さ15~20cm、幅20~30cmを測り、土師器小皿の破片が出土している。土坑状遺構は調査区外に伸び全容は不明であった。出土遺物には土師質羽釜、瓦器塊などがある。

これより下層については全域に礫層(玉砂利層)となり、自然流路と考えられる。

(H区の調査) F・G区と堆積の状況がまったく異なる。上層から中世の包含層、奈良時代の包含層を確認した。次いで古墳時代の溝状遺構も検出した。ここからの出土遺物には著しくローリングを受けているものもある。また、これより下層は砂層及び礫層となり東方に落ち込んでいる。すなわち、調査地北側の和泉山脈から派生する谷状地形の一端と考えられる。(佐伯 和也)



調査地全景(東から)



G区 土層堆積状況(北東から)



H区 南壁土層堆積状況(西から)

西庄遺跡の第6次発掘調査

西庄遺跡は和歌山市北西部の西庄・本脇地内の標高4.5m前後の砂堆に位置する海浜集落である。県道西脇・山口線道路拡張工事に伴う事前確認調査で、平成7年度に試掘調査を実施した結果、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物や石敷製塩炉などが確認され、多数の須恵器や製塩土器、土錘・釣針などの漁労具が出土し、東西約500mに及ぶ大規模な遺跡であることが判明した。この結果を受け、平成8年度から、現存する県道の南側と北側に隣接する幅約6mの拡幅部を順次発掘調査を継続している。これまでの調査で、古墳時代の竪穴住居や製塩炉・古墳、鎌倉時代の土坑墓などが確認されている。本年度は第6次としてG地区の約130㎡を調査した。

上面遺構では、中世の柱穴4基、土坑9基、鋤溝状遺構3条を確認した。土坑の2つは長さ約2.2m・幅約1.3mで、内部には割れた結晶片岩や瓦器・土師器などと獣骨が投棄されたように埋没していた。柱穴の1つには瓦器椀1点が外面を上にして埋置されていた。

地山面で検出した下面遺構は、深さ約0.3mの底面が平坦な落ち込みと長楕円形の土坑2基である。遺物の出土が皆無であったので、時期は断定できないが、層位的にみて古墳時代のものと推定される。

出土遺物はコンテナ約2箱で、中世の瓦器や土師器が多数を占める。古墳時代の須恵器の杯身や甕の破片も少量出土している。他には、玉縁状口縁の中国製白磁碗、黒色土器椀、内面に車輪紋の当て具痕がみられる須恵器の甕、奈良時代の砲弾形製塩土器、古墳時代初頭の脚台Ⅱ式の製塩土器、直径5cmの土錘がある。

今回の調査地点は西庄遺跡の東部にあたり、遺構密度は希薄で、遺物の出土量も少なかった。前回の5次調査では古墳4基が西側約20～40mの地点で検出されており、古墳時代の集落や墓域の東限ではないかと考えられる。中世の集落は、柱穴や土坑が検出されたことから、もう少し東にまで範囲が広がっていたようである。

(黒石 哲夫)



上面遺構全景（西から）



下面遺構全景（西から）

川辺遺跡の第2次発掘調査

本調査地は第1次調査地の東に隣接する畑地を一枚挟んだ延長部分から24号バイパスまでの約2740m²を対象に行なった。調査地は里道により分断されているためA～F区と呼称した。

遺構検出は堆積土(ベース土)と遺構の埋土が酷似し作業に難をきたした。この為本調査の遺構の殆んどは同一面から確認されるべきものであったが、本来の検出面からかなり下層で検出した。

検出遺構には中世の溝・土坑・柱穴・土坑墓、古代の遺構としては掘立柱建物・土坑・土坑墓・溝、古墳時代の遺構は溝・土坑・竪穴住居等の遺構がある。以下、主だった遺構について記述する。

調査地中央北側で古代(飛鳥時代)の掘立柱建物を検出した。これの規模は東西4間、南北4間以上で、調査区外の北方向に延びるものと考えられる。柱穴の掘形は一辺0.8～1.0mの長方形



掘立柱建物(南から)

を呈し、遺存の深さは約50～80cmを測る。間尺は約2.1mを測る。なお、これに類似する建物は過去、国道24号バイパス建設時の調査においても確認されている。

この他、同時期の土坑墓と考えられる遺構も調査区西側で数基検出された。



上面遺構全景(東から)

次に特筆すべきは堅穴住居址である。第1次調査の東端で堅穴住居址（隅丸方形）を1棟検出している。この住居址がこの時期の集落の西端と考えられ、本年度調査においてこれより東側にかけて集落が展開されていた事が明白となった。

検出し得た堅穴住居址は14棟を数えたが、土層の酷似や多量の礫を含むといったような、検出作業上の悪条件が重なったため遺構の見落としなどが十分考えられる。本来これ以上の棟数の堅穴住居が存在していた可能性が大である。

検出した住居址のうち炉を設置しているもの5棟、竈を設置しているもの2棟を確認した。他のものについての炉あるいは竈は不明であった。また、住居址に付随すべき施設（柱穴・貯蔵穴・壁溝）をまったく確認する事ができないものもあった。これらについては再度床面確認をするため断割り作業を行なった。

上記の遺構の中でやや大きなものが1棟ある。それは一辺約8m、遺存の深さ25～30cmの隅丸方形のものである。これは主となる柱穴が無く、中央炉の北側に隣接して直径約30cm、深さ約15～20cmの炭や灰を含んだピットを4基検出した。これらについては上屋構造と何らかの関係があるのか、それとも炉などと同様のものなのか判らない。

今回の調査によってこの周辺の微高地に弥生時代から古墳時代にかけての集落が形成されていた事が明らかとなり、この広がりを目指すことも今後の調査課題の一つとされる。

（佐伯 和也）



下面遺構全景（東から）

徳蔵地区遺跡の第4次発掘調査

徳蔵地区遺跡発掘調査は、平成15年半ば完成予定の南部インター建設に伴う調査である。平成10年度より本格的に調査し、縄文時代晩期～弥生時代前期、古墳時代前期の遺構・遺物、八丁田圃と呼ばれる条里型地割の水田形成と展開、室町時代の全国屈指の規模・内容の高田土居（城）の調査など考古資料で明らかになる南部の地域史は、豊かな内容を持つことが明らかになりつつある。それは海を道として外界を目指した人々、黒潮洗う和歌山県南部という位置に大きな意味があることも判明しつつある。

平成12年度の調査では、調査区12—④と呼ぶ微高地から、縄文時代中期前半・縄文時代後期前半・弥生時代前期から古墳時代前期の各時代の集落を3,600m²、三面にわたって検出した。この地域一帯は、南部川流域における各時代の中核部分を占める。また古川支線に沿って古墳時代後期の河川跡、室町時代の溝など、八丁田圃の水田跡、高田土居（城）外堀北東隅コーナー部分の堀なども検出した。

最下層の面から検出した縄文時代中期前半集落跡は、今まで西日本で一切遺構が発見できず、空白期と呼べる時代のものである。標高4.5mで、遺構の希薄な広場と想定できる空間を取り囲むように13棟の竪穴住居が馬蹄形に並んでいた。竪穴住居は、平面プランが長方形を呈し、4m×3m前後、深さ20cm前後である。また掘立柱建物を構成する柱穴や土坑なども数多く確認した。土坑は、住居周辺部では大きいなど特徴がある。船元Ⅳ式期の西日本最古の埋甕は2基検出した。東日本で埋甕が流行りだす時期に、既に南部徳蔵地区遺跡では、その祭祀を瀬戸内文化圏の船元式土器を使用して取り入れている。

出土した土器には、縄文時代中期初頭の鷹島式土器がなく、中期前葉の船元Ⅰ式期の終わり～Ⅱ式がピークで、Ⅲ・Ⅳ式期が存在する。13棟以上検出している竪穴住居は、船元Ⅱ式の時期が主である。他地域から持ち運ばれた土器も多く、中部高地・東海地方・関東地方のものがある。コンテナに3箱程度であるが、近畿地方では類例をみないほどの量である。とりわけ、西関東から中部高地に分布する勝坂式土器の出土量は西日本全域の当該期の遺跡から見ても特筆すべき量といえる。石器は、運びやすいように板状に割られた香川県金山産のサヌカイト原材料が20枚、広場と考えられる場所から出土した。また奈良県二上山産サヌカイト原石も出土する。長野県和田峠より持ち運ばれたと考えられる黒曜石の剥片の出土も見られる。

縄文時代中期末には西日本の縄文社会は大きく変動する。その前の段階の考古資料が出現した事、集落の構成・土器編年などが明らかになることから、考古資料としては、第一級といえる。微高地のひろがり約40,000m²の面積があり、西日本でも最大級の縄文時代中期前半期の集落と考えられる。各地の石器原石・土器出土量が多い点などから、太平洋ルートの一夫拠点集落、近



縄文時代中期前半竪穴住居群



縄文時代後期前半集落全景（西から）



縄文時代後期前半竪穴住居

畿中央部・瀬戸内・四国と東海・関東との紀南の交流・交易拠点、中継集落と考えられ、西日本で初めて確認された最大級の縄文時代中期前半集落である。

気候が寒冷化し、東日本で大集落が失われ、人々が関東以南に移動したとされる**縄文時代後期前半期の集落**は、中層の面より検出され、墓域（埋甕と配石墓）と円形竪穴住居で構成されている。東側縁辺部には円形の竪穴住居、西側には埋甕10基と配石墓が配置される。その間には大量の円礫が存在するが人為的ではなく、微高地を形成する地質と考えられる。竪穴住居は、楕円形を呈し、南北4.4m・深さ60cmで、床面は平坦である。支柱穴は4本あり、中央部には土坑がある。下層からは北白川上層式の土器が出土する。非常に残りのよい配石墓も検出した。東と西に住居と墓域を区分した集落と考えることができる。近時、段丘に位置する大塚遺跡が調査され、当該期の集落も確認されつつある。縄文時代後期の集落の動向も、今後より詳細に明らかにされるであろう。

上層の面からは、**弥生時代前期**の円形竪穴住居・土坑と**古墳時代前期**の8棟の方形竪穴住居・区画溝・掘立柱建物で構成される集落を検出した。

弥生時代前期の円形竪穴住居は、微高地の縁辺部に長軸8m・短軸7.6mで、八本の支柱穴がある。中央部には炉があり、炉を囲む形で東西脇に柱穴が存在する。松菊里型の系譜をひく竪穴住居と考えられる。縁辺部と低湿地の間には、用途は不明ながら堅田遺跡でも出土した大型の土坑が存在する。

弥生時代後期末から古墳時代前期の集落跡は、方形の竪穴住居8棟で構成され、方位から二群に区分される。一時期の集落は、大型の竪穴住居を核にして、それを取り囲むように住居が配置される。付近の低湿地には旧河川を利用した水田跡なども検出しており、当該期の南部平野での動向が把握できる資料が蓄積されつつある。

日高川水系からは、三重の環濠に囲まれ、日本最古の青銅器ヤリガンナの鋳型が出土した堅田遺跡が存在する。堅田遺跡の動向と徳蔵地区遺跡で出土した縄文時代晩期から弥生時代前期の集落動向を比較検討する中で、紀南地方での稲作文化がどのように入ってきたのか、東海地方や瀬戸内地方とどのように弥生時代前期は結ばれていたのかなど、多くの問題点が提起される。また、日高川水系から南部川水系、会津川水系にかけては、大型の見る銅鐸が出土する地域である。紀ノ川水系・亀ノ川水系・有田川水系・日高川水系は、聞く銅鐸が出土する。共に重複して出土するのが日高川水系である。大型銅鐸が大量に出土する南部平野の集落動向が判明する考古資料が確認されたことは、今後の集落と銅鐸祭祀との関連を考える上で重要な視点を提供する。

(渋谷 高秀)



藤倉城跡（川関遺跡）の第2次発掘調査

前年度に西側に隣接する戦国時代の山城である藤倉城の調査を行ったが、その際に、山城東側の那智川沿いに広がる水田部も自動車道料金所の建設予定地になっているために試掘調査を行った。その結果この場所にも中世の遺跡が存在することが新たに確認され、所在地の地名から川関遺跡と名付けられた。本年度調査を実施したのがこの川関遺跡である。

川関遺跡の現況は、現在の海岸線から那智川沿いに約300m内陸部に入った標高4m前後の地点で、水田や畑となっている。今年度の調査は、料金所建設予定地部と道路橋脚部の併せて9,600㎡ほどについて行った。なお、調査の関係上、調査区は水田部5～8地区と橋脚部1～4地区と便宜上仮称している。

水田部5地区は、山裾部にあたり遺構密度も低いためこの付近までは集落は広がっていなかったものと考えられる。

水田部6地区は、幅3mの溝と、鎌倉時代前半のものと考えられる2棟の建物跡を確認した。

水田部7地区は、12世紀後半から13世紀前半の山茶碗を中心とした多量の遺物が出土した。また、1間×2間の2棟の小規模な建物の付近からは、鉾やフイゴの羽口などが出土しており金属製品製造に関する作業小屋と推定される。

水田部8地区は8,000㎡を超える広い地区で、全面に遺構密度が非常に高く、様々な遺構を検出することが出来た。建物跡は52棟が確認できた。それらの大半は、掘立柱の総柱のもので建物の軸方向には、大きなばらつきは無く、全ての建物が、方位を意識して建てられている。建物の規模は、2間×3間のものが最も多いが、6間×6間以上（床面積約170㎡）の大規模なものも認められる。建物の時期については、出土している遺物等から、鎌倉時代前半のものと同室町時代後半のものに大別できるようである。

井戸は木組みのものが6基、石組みのものが9基の合計15基を検出した。この築造技法の違いは時期によるもので前者は鎌倉時代前半、後者は室町時代後半のものと考えられる。井戸の深さは水脈の関係からかどれも2m程と、浅いものである。



水田部8地区（南より）

水田部8地区では、幅1m前後、深さ50cm程の溝が、東西・南北方向に掘られているのを確認したが、これらの溝は屋敷地を区画するもので、屋敷地はこの区画溝によって、方形状に地割されている。今回の調査区域では、狭いもので約792㎡、広いものでは約1,400㎡の合計8区画を確認した。これらの区画溝は出土遺物から15世紀代に造られたものと考えられる。

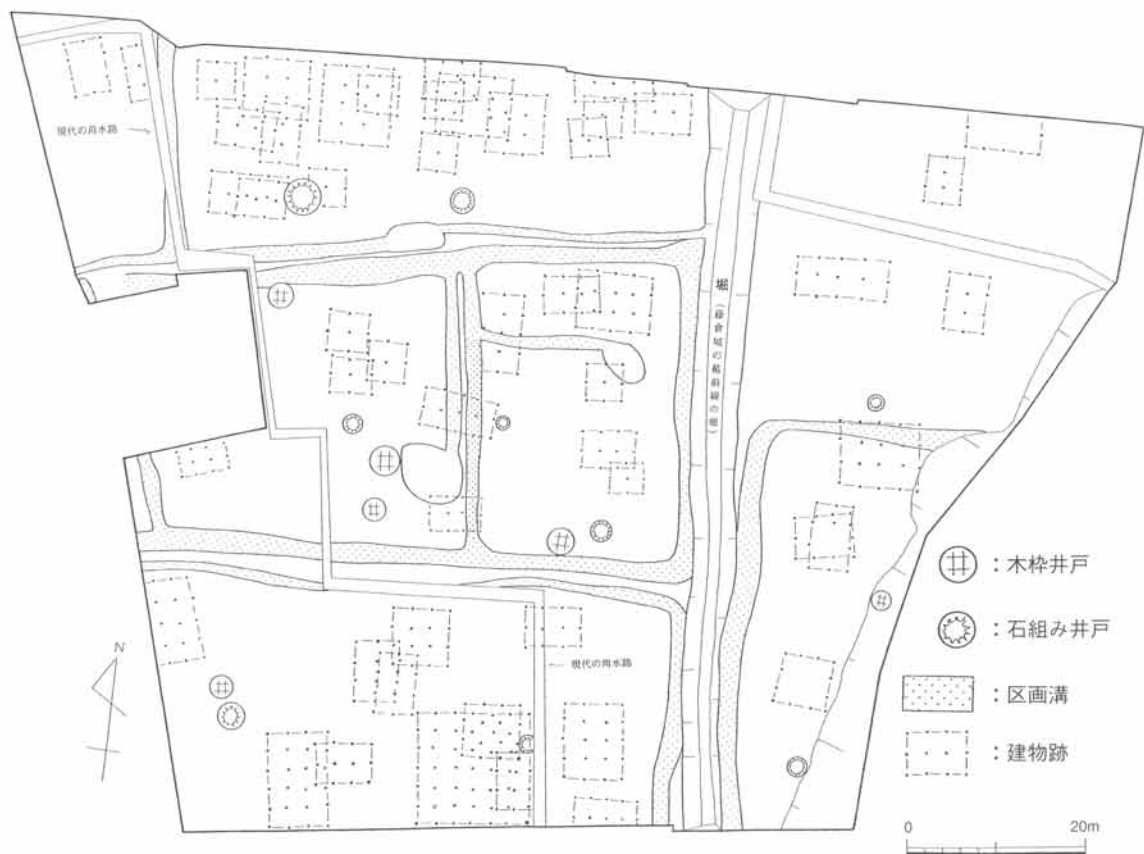
調査区をほぼ南北に貫流している幅約5m、深さ1.4m余りという大きな溝は、出土遺物の検討により、川関遺跡の時期よりも後の16世紀後半に造られ、藤倉城の最前線を防御するための堀で、藤倉城がこれまで考えられていた以上に大規模であったということが判明した。

橋脚部1～4地区では、狭い調査区ながら、2棟の建物跡を検出した。

今回の調査で出土した遺物の点数は非常に多く、時期的には平安時代末から江戸時代初めにかけてのものであるが、特に鎌倉時代前半と、室町時代後半の2時期に集中している。鎌倉時代前半のものには、知多半島周辺で生産されていた山茶碗が圧倒的に多く、常滑や渥美の甕、東播磨地方の捏ね鉢、伊勢地方の土鍋、中国製の青磁・白磁の碗などがある。室町時代後半のものには、瀬戸の搦鉢・天目茶碗、美濃の灰釉皿、常滑の甕、備前の壺・甕・搦鉢、中国製の青磁碗や染付けの碗・皿などが出土している。

今回の調査により、川関遺跡は鎌倉時代前半と、室町時代後半の2つの盛時があったことが判明したが、前者に含まれる建物跡には大規模なものが多く、また遺物も中国製の高価な磁器を多く含んでいることから、一般的村落というよりは、那智山に関係する諸施設と想定できる。後者については、那智山の権力者であった実方院米良氏一族の遺産相続に関する文書に「中村」という今回の調査区を含む字名が出てくることから、区画溝のある屋敷地のいくつかは、米良氏一族の居住するものであった可能性は高いものと考えられる。

(三浦 基行)



水田部8地区 主要遺構概略図

宇田森遺跡の確認調査

宇田森遺跡は和歌山市北東部の宇田森集落周辺の紀ノ川が形成した標高9～10m前後の沖積平野に所在する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。戦前から戦後にかけて、弥生時代中期の遺跡として報告され、昭和41年度～43年度と平成3年度に5回の発掘調査が実施され、竪穴住居跡など多数の遺構と遺物が発見されている。その結果、本県の代表的な弥生時代中期の集落跡として広く知られている。今回は盛土された更地に、下端幅約2mで南北方向に約35m（Xトレンチ）・東西方向に約55m（Yトレンチ）の調査区を設定して確認調査を実施した。

Xトレンチ 中世の遺構として、室町時代中期の楕円形の土坑と溝を検出した。中央部には幅約4.0m・深さ0.3mの窪地があり、瓦片や備前の摺鉢や人頭大の石が廃棄されていた。古墳時代の遺構は南端部の窪地があり、布留式古段階の小型丸底壺などが出土している。弥生時代の遺構は北端部で竪穴住居の壁溝だと考えられる幅約10cm・深さ約6cmの弧状を呈する溝を検出した。位置関係から昭和42年度調査のA地区2号住居跡の壁溝だと考えられる。内部の柱穴は住居に伴う可能性があり、弥生時代Ⅲ様式新段階の甕と壺が出土している。他には中期の土坑や後期の溝を検出した。

Yトレンチ 近世の遺構として、中央部で土坑墓群を検出した。墓は5基で直径50～70cm・深さ30cm前後の円形の土坑墓である。1基では直径約52cm・高さ約24cmの底部に穴が開いた鉄鍋を逆さに置いて蓋に転用していた。18世紀頃の柿釉の小皿が出土している。中世の遺構は西部で柱穴と土坑を検出した。古墳時代の遺構には幅約1.2m・深さ約0.2mを測る断面コの字状の溝があり、須恵器の甕が出土した。弥生時代の遺構には中期から後期にかけての土坑や溝・窪地がある。長さ約3.0mの楕円形の土坑からは弥生時代Ⅲ様式新段階の甕や壺がまとめて出土した。

調査の結果、東部から南部は遺構密度が低く、弥生時代の居住地域は竪穴住居が密集している昭和42年度のA地点から大屋津比売神社周辺にかけての範囲だと推定される。

（黒石 哲夫）



Xトレンチ全景（北から）



Yトレンチ全景（西から）

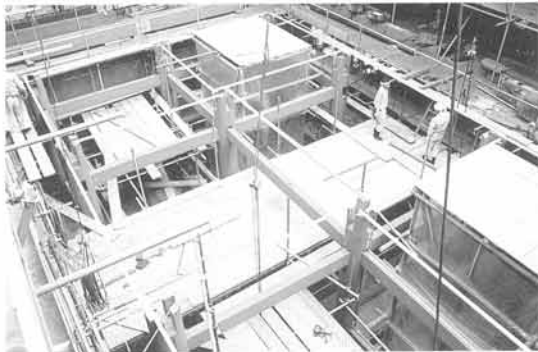
重要文化財 粉河寺大門保存修理の設計監理

粉河寺大門の保存修理事業は平成10年10月から42ヶ月の計画で開始されたが、6ヶ月延長し48ヶ月に計画変更した。3年度目に当たる本年度は、木部の繕いや組立てなどの木工事を主体に、構造補強も併せて実施した。組立ては、柱立てより始め小屋組枯木の取付けまで完了した。

粉河寺大門は宝永4年（1707）の建立で、築後約300年を経過している。地盤の状態も良く、材そのものの傷みは少ない。しかし工法的に問題と考えられる箇所があり、構造診断調査でも強度の不足が指摘されたため、構造補強計画を立てた。主な補強箇所は以下の通りである。

- ① 1階軸部の足元廻りー地震時水平力に対する保有水平耐力の不足
地覆、柱、腰貫で囲われた横板壁の部分に、パネル（組立式、ステンレス）を内蔵した。
- ② 1階組物上部から2階柱盤下端面までー2階柱軸力の支持
2階以上の荷重を1階柱上に直接伝達できるよう、1階組物直上に鉄骨梁を掛け渡した。
- ③ 2階組物・軒廻りー軒先荷重の支持方法
隅行きの部材（肘木、尾垂木等）に、構造体（ステンレス）を内蔵または沿わせた。隅行きは手先が長くなるため、もっとも損傷の目立つ箇所であった。

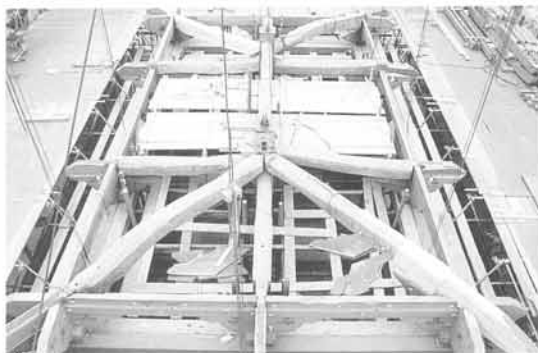
補強材には主に金属資材（鉄またはステンレスの形鋼・板）を用い、当初材に沿わせる或いは内蔵するなどして、強度を補完しつつも、当初形態になるべく影響を及ぼさないように配慮した。補強材はボルトで木部と緊結している。 （鈴木 徳子）



1. 1階軸部の組立て



2. 1ー2階間の鉄骨梁補強



3. 2階組物の組立て



4. 軒廻り、小屋組の組立て

重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟保存修理の設計監理

旧中筋家の保存修理事業は平成12年2月から98ヶ月の計画で開始された。今年度は仮設工事と長屋蔵の解体工事を主に進めた。仮設工事は事務所・工作保存小屋や主屋・表門・北蔵の素屋根等の建設を行ない、本格的な解体工事に着手する体制を整えた。素屋根建設に伴い北蔵東下屋・内蔵南側庇・未指定建物の人力車庫を解体し、工事用進入路確保のために西側と北側の土堀の一部を解体した。昨年度に素屋根が建てられた長屋蔵は、今回の修理で解体せずに再利用する予定の東面土壁を除き、軸部までの解体をほぼ完了した。

長屋蔵調査事項

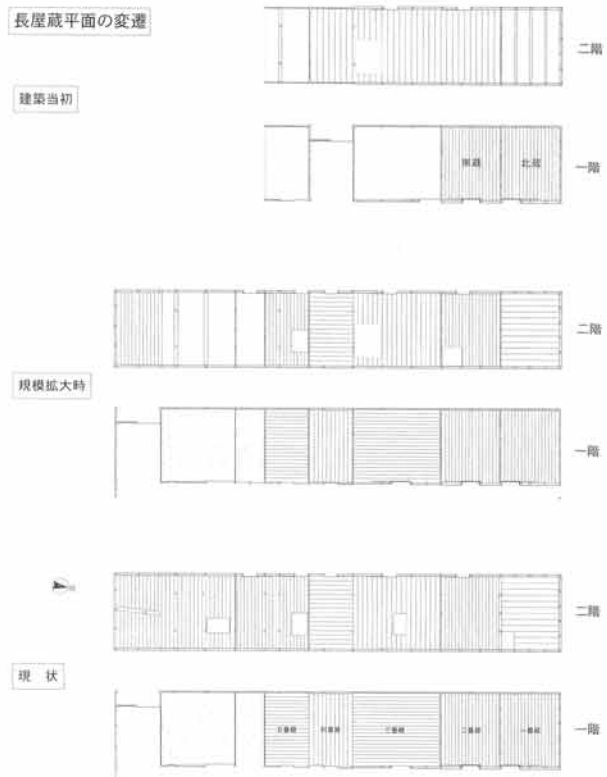
長屋蔵は、現状では桁行29.7m、梁間4.9mで、北側は切妻屋根、南側は入母屋屋根となっているが、調査結果から規模拡張などの改変があることが推測できた。部材に記された番付から建築当初19.8mの間口（現状北側部分）で完結していたと考えられ、部材の痕跡から南側が入母屋屋根となっていたことがわかった。建築年代を示す資料としては長屋蔵1階北端板間の建具に墨書「天保八年」（1837）が認められた。現在の規模に拡張されたのは、和釘が使用されていることから明治初期までであり、部材の痕跡から一旦すべてを解体し現在の規模に拡張する形で建て直されたものと考えられる。昭和28年に所有者が変わって以降、間仕切壁の撤去等が行なわれ、現在に至っている。

旧中筋家の建物の沿革は詳細がわかっていないが、主屋の鬼瓦に建築時期を示す嘉永5年（1852）の銘が見つかるなど、資料は集まりだしている。今後発掘調査や古文書調査等を含め、解体に伴って調査を進めていく予定である。

（多井 忠嗣）



長屋蔵解体の状況（南から見通す）



主屋素屋根の建設

旧中筋家主屋はのべ四棟が「コ」字形に連なった複雑な形式で、東西23m、南北25mと規模も大きい。このため主屋を覆う素屋根も大規模なものとなる。しかしながら屋敷地は主屋のほかに多くの付属屋が建つほか、南北には庭園が残る。建設にあたっては多くの困難が予想された。

駆体部は枠組足場で造ることとしたが、屋根構造が問題である。素屋根梁間はどう少なくみても28m以上に及び、これを覆う屋根は従来の単管トラス組では不可能であった。また屋敷内でクレーンを据えることができるのは主屋南西庭のみであるが、ここからでは一番遠い北東側で作業半径が30mを超える。25t～50tクラスの自走式クレーンでは750kg程度しか吊りこめない。

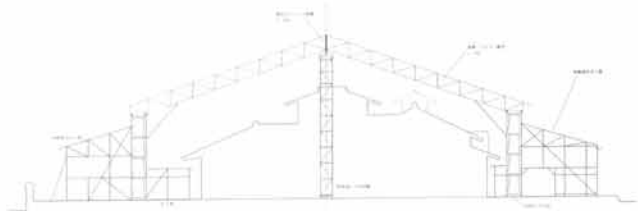
これらの条件を満たす工法の施工例を調査し、既製品では枠組形トラスとアルミフレームのテント屋根が適当と判断し資材メーカーに相談した。しかし性能や施工性は要求を満たすものであったが、ともに予算が倍近くに膨れることになり設計を見直さざるをえなかった。

そこで主任、監督と協議をおこない、鉄骨を組み合わせたトラスで屋根を造り、棟支柱で補強する案を作製した。そのうえ構造の検討を専門の設計事務所に依頼した。その結果上下弦材は6×75×75mm、トラス材は6×60×60mmのアンゲル材を用いることに決定。1スパンあたりの重量は700kgに押さえることができた。予算面でも当初設計をやや超える程度に収まった。しかし軽量設計の特注トラスは施工が難しく、請け負った建設会社には慎重な施工をお願いした。

庭園内の樹木の伐採は逐一指示して最小限にとどめ、駆体を枠組足場で組み立てた。鉄骨トラスは地元の鉄工所が製作。吊り込みは35t自走式クレーンでおこなった。主材は6mmしかないので、単独では自立できないほど弱い。座屈をふせぐためH鋼を介して吊り込んだが、それでも最初の一本は若干変形してしまったほどである。母屋止めのクランプを組み付けたトラスの重量は、まさにクレーンの能力ぎりぎりであった。すべてのトラスを掛けたのちに、桁行方向に座屈防止のトラスを単管で組み付け、屋根を塩ビ波板で葺いた。台風の襲来が心配であるが、軽量設計ながらもそれらが組合わさることによって全体として耐力を確保することができた。素屋根で覆われた主屋はいよいよ本格的な解体修理にかかる。 (御船 達雄)



トラス組立て状況



主屋素屋根の断面図 (左右は作業ステージ)

旧中筋家住宅未指定建造物（人力車庫）調査

旧中筋家の屋敷は、和佐組の大庄屋をつとめた中筋家によって、江戸時代末期に整えられた。敷地中央東よりに大広間を備えた規模の大きな主屋が建ち、敷地周囲は土塀で囲まれていて、大庄屋の屋敷構えをよく残している。主屋、表門、長屋蔵、北蔵、内蔵、御成門の6棟は重要文化財の指定を受けているが、人力車庫、味噌部屋、茶室、風呂・便所の4棟は未指定である。

人力車庫の解体調査は、解体前に図面作成、写真撮影をおこない、解体中には建築工程ごとの仕様・工法の調査、写真撮影をおこなった。人力車庫は表門と長屋蔵の間に東面して建ち、梁間4.4m、桁行6.0mの木造平屋建て、切妻造り、本瓦葺きで、建築年代は不明であるが、和釘が使用されていないため、明治時代中期から大正時代にかけての建築であろう。

人力車庫は北と南の二室の土間よりなり、南西隅奥に便所がある。北室の西面に出入口があるが、柱と桁に壁の痕跡があり、当初は壁であることがわかった。その他は特に大きく改造されているところはなく、現状ではほぼ当初の形式を保っていた。南室には幅20~30cmの敷石が約1m間隔で2列並んでいる。これは人力車の車輪の間隔に相当することから、人力車を格納する際に使用されていたものであると推測される。

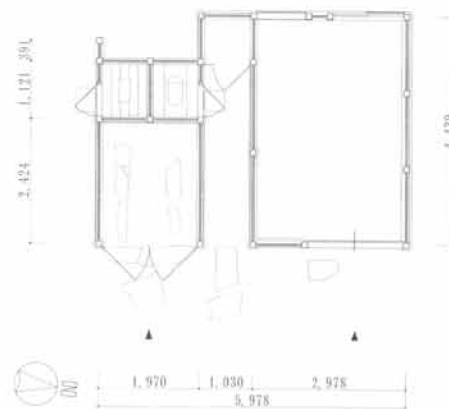
敷地の南に位置する表門外壁の人力車庫が南へ延びて突き当たる場所に、人力車庫の前身建物の取り付け痕跡がある。そこで解体調査終了後、平成12年12月に約2週間かけて発掘調査をおこなったが、特に前身建物の遺構は確認されなかった。しかし、前身建物が表門に接していたことは痕跡から明らかであり、表門と人力車庫で敷地の南西隅を囲うような配置が、現在の建物の配置にも踏襲されていることがわかる。

現在、人力車庫の解体部材は、復原することを考慮し保存格納している。

(重要文化財 旧中筋家住宅保存修理工事事務所)



解体前の人力車庫



解体前平面図

重要文化財 和歌浦東照宮保存修理の設計監理

平成10年1月から開始した東照宮の保存修理事業は、平成12年9月に全ての事業を完了した。最終年度である本年度は、本殿・石の間・拝殿、唐門、東西瑞垣の塗装工事、本殿・石の間・拝殿の檜皮屋根葺き替えの2次工事を行なったほか、自動火災報知設備復旧整備工事、仮設解体工事を行ない6月に全ての工事を完了した。

墨書や古文書などの調査から、東照宮は徳川家康の50周年忌毎に大規模な修復が行われ、この間にも屋根や塗装の修理が繰り返されるなど、華麗な大工彫刻や彩色が紀州藩の厚い加護により維持されてきたことがわかっている。明治に神仏分離令の洗礼を受けたが、創建当初の石灯笼が並ぶ参道から楼門、廻廊、唐門、瑞垣、社殿と一連の建物が残ることに加え、大正7年には文化財として非常に緻密な塗装修理が行なわれ、江戸期の姿をよく伝えている。今回の修理においては、大正修理時の姿を規準とし、唐門・瑞垣の昭和45年に改変された文様などは、大正見取図に準じて復した。300点に及ぶ大正見取図は、極彩色で描かれた上に絵具の色名が墨で注記されており、各細部も運筆の指示が書き込まれているなど丁寧に作成されている。先人の意図を受け継ぎ、将来活用できるよう目録を作成し資料化に務めた。

(多井 忠嗣)



唐門 天井画塗替え状況



大正見取図 本殿簷股(鸞)



竣工 唐門、瑞垣、拝殿



竣工 拝殿向拝正面

湯浅町伝統的町屋調査業務

湯浅における伝統的建造物群保存対策調査は、平成11年度から2ケ年の計画で開始された。今年はその2年目で、補足調査と報告書の作製を行い、調査業務は完了した。

調査は、大阪市立大学、和歌山大学、和歌山信愛女子短期大学等と合同で実施し、当センターは伝統的建造物（町屋および社寺）の個別調査を担当した。昨年までに17棟の町屋について実測調査を行ったが、今年は3棟追加し、また社寺についても5ヶ所あらたに調査（主な建物の実測、配置図の作製、聞き取り）した。こうした調査の結果をもとに、図面作製や本文執筆など、報告書に向けた作業を進めていった。

一方で、11月には「湯浅町並みウォッチング&講演会」と題したイベントが、湯浅町の主催で開催された。みんなで湯浅の町を歩き、その魅力を改めて感じてもらうというイベントで、当日は天候にも恵まれ多くの参加者で賑わった。三村浩史先生（京都大学名誉教授）による講演会もわかりやすく好評であった。また2月の調査委員会では、伝建地区の範囲をどうするかなど、今後の町並み保存事業に向けた具体的な話し合いがもたれた。

対策調査は終了したが、湯浅の歴史的町並みを生かした町づくりは、いまようやくスタートラインに立ったと言えよう。少しずつ住民の意識も高まってきたようである。今後の展開が期待される。

(川戸 章寛)



北鍛冶屋町の町並み



北町の町並み



蔵の建ち並ぶ景観



町屋の表構え

西日本最古の埋甕 —徳蔵地区遺跡—

徳蔵地区遺跡発掘調査では、埋甕を12基検出した。このうち2基（埋甕⑦⑧）が西日本最古の例となる縄文時代中期中葉の埋甕で、10基が今まで西日本でも確認されていた縄文時代後期の埋甕である。（本文文章・写真の埋甕⑦⑧は次項の表に対応する）

〔埋甕⑦〕直径55cmの掘形をもち、深さは22cmと浅い。埋設された深鉢は、直径45×35cm、残存高19cmの範囲で正位した状態で埋設され、底部には直径12cmの穿孔がなされる。土器の出土状態や土坑の深さから考えて、口縁部が外側に落ち、体部が土器内に落ち込んだ状態で検出したと考えられる。土器埋納後、土圧あるいは何らかの理由で、崩れた可能性をもつ。

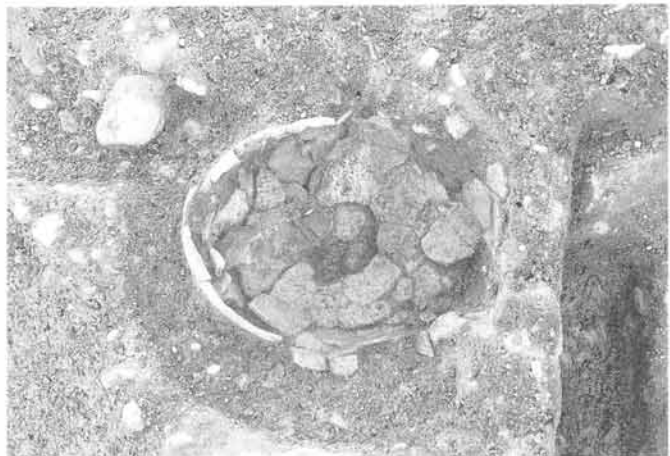
〔埋甕⑧〕直径52cmの掘形に、直径30×25cm、残存高15cmの深鉢が下部1/4が残り、正位の状態出土した。上半部が削平された状態で出土したため、口縁部は残っていない。底部は穿孔されているが、土器の残存状態が悪く、穿孔状況は明瞭でない。

出土した2基の埋甕は、縄文時代中期中葉の船元Ⅳ式の深鉢で、正位の状態埋設され、底部穿孔があった。標高4.35mで埋甕を検出したが、口縁部が欠損しているため、当時の生活面はすでに削平されていると考えられる。2基の埋甕は、距離にして25mである。

ここで、2基の埋甕が出土した意義は二点ある。一点は、従来西日本では、縄文時代中期末に東日本から埋甕が伝播すると考えられていたが、東日本で流行しだす段階の埋甕が今回確認されたことである。二点目は、土器そのものは船元式という瀬戸内文化圏にありながら、東日本の文化・埋甕という埋葬形態を西日本で最初に、紀南地方で受け入れた点にある。今後更なる展開が必要になるろう。（齋藤 有美）



埋甕⑦出土状況（南西から）



埋甕⑧出土状況（南から）

縄文時代後期の埋甕群

今回の徳蔵地区遺跡の調査では、12基に及ぶ縄文時代の埋甕が確認された。ここでは主に縄文時代後期前葉を中心に概略を述べる。調査区面積は、3,600m²に及ぶが、埋甕は中央部から西半部にかけて検出されている。また調査区東端部で、後期前葉の北白川上層式の竪穴住居が1棟確認されていることから、居住域と墓域が分離していた可能性が考えられる。

埋甕の主な特徴については、下記の埋甕一覧表のとおりである。埋位とは土器の埋め方で、今回確認したものは全て正位（正立）である。穿孔状況とは、土器の底部を故意に打ち欠く、もしくは穿孔することである。今回は12基のうち9基に底部穿孔を施すが、他は底部打ち欠き・穿孔ともに認められない。なお埋甕⑥は底部穿孔とともに、土器下腹部南側に直径3cm程の穿孔を施す特殊例である。

土器型式から埋甕群の存続時期を考察すると、埋甕⑦・⑧が中期中葉の船元IV式、中期後葉から後期初頭の空白期を経て、埋甕⑨が四つ池式、その他9基が次の型式である北白川上層式（下記表では『上層式』と略す）の範囲に収まると考えられる。そこで埋甕群は最盛期を迎え、そして断絶する。埋甕使用土器は、ほとんどが無文の粗製深鉢であるが、埋甕⑤が口縁部に文様を施す胴部縄文地の深鉢であり、埋甕⑨は胴部に逆三角形の沈線文様を施す有文深鉢である。埋甕⑫は無文ではあるが、繊維束状のもので条痕を施す（土器については、奈良大学泉拓良教授の教示を得た）。

土器の残存状況としては、埋甕①・④は上面で確認し遺存良好であったが、他は上半部が削平された状態であるため、当時の生活面より高い所に土器を埋設していた可能性もある。土器内に礫のあるものが4例あり、内部に何が存在したか、もしくは内部が露出していたか等の検討材料にもなる。

縄文時代中期末から後期前葉という時期には、既に埋甕が中部高地から近畿地方へ波及したことが確認されている。今回は、改めてその西漸過程が裏付けられるとともに、和歌山県南部でまとまった良好な資料が得られたことは、東西縄文文化の在り方を知る上でも重要である。

遺構名	埋位	穿孔状況	土器型式	器種	残存部	その他
埋甕①	正位	底部穿孔	上層式	無文深鉢	ほぼ完形	土器内に礫8個
埋甕②	正位	底部穿孔	上層式?	無文深鉢	下部1/3	底部に据え石?
埋甕③	正位	なし	上層式?	無文深鉢	下部1/2	
埋甕④	正位	底部穿孔	上層式	無文深鉢	完形	土器内に礫1個
埋甕⑤	正位	なし	上層式	縄文地深鉢	ほぼ完形	土器内に礫3個
埋甕⑥	正位	下腹・底部穿孔	上層式	無文深鉢	下部1/3	土器内に礫4個
埋甕⑦	正位?	底部穿孔	船元IV式	縄文地深鉢	ほぼ完形	
埋甕⑧	正位	底部穿孔?	船元IV式	縄文地深鉢	下部1/4	
埋甕⑨	正位	なし	四つ池式	有文深鉢	下部1/4	
埋甕⑩	正位	底部穿孔	上層式?	無文深鉢	下部1/3	
埋甕⑪	正位	底部穿孔	上層式?	無文深鉢	底部のみ	
埋甕⑫	正位	底部穿孔	上層式?	条痕地深鉢	完形	

埋甕一覧表

(立岡 和人)



埋甕⑫（南から）

徳蔵地区遺跡発掘調査現場の普及活動

南部平野で平成8年度以降に埋蔵文化財の調査が着手されるまでは、考古学的な歴史を垣間見ることが断片的な資料でしか成し得ることができなかった。それ故に、当地域の方々にとっては調査と触れ合う機会が限られたものとなっていたのが現状である。

今回、継続して実施している徳蔵地区遺跡における発掘調査では、言うまでもなく縄文時代から近世に至る数々の成果を上げている。これらの成果を、調査現場の時点で調査者側だけで終えるのではなく、普及活動として地域の方々に還元しようとの趣旨からの出発である。俗に言う、地域と密着した、相手の顔の見える活動を目指している。

普及活動一覧にもあるように、南部の徳蔵地区遺跡発掘調査現場では地域の小・中学校の生徒から学校教職員を始め、高等学校教職員・議会議員など、様々な年齢層を対象に普及活動を実施してきている。これらの普及活動には、当然、その年齢層により様々な見方が生じてくる。現場では、事業規模が大きいために、当センター職員2名、専門調査員2名の体制で事業をこなしてきた。そういう調査体制が組めたことからこそ、本来の当センターの活動の一つである「普及活動」が成し得たのである。現場では、日々、様々な遺構・遺物の対応に追い回される中での活動であったため、地域の方々に十分な理解が得られたかどうかは、長い目で見ていく必要がある。こんな中、小学生の「歴史がおもしろくなった」との言葉は、我々の成果の一つである。

活動の中では、通常、一般的に行われる現地説明会は、もちろんのこと、自分の手に道具を持って土を掘り返す発掘体験、土器や石器の実物を手に取って間近かで観察する。推定復元した竪穴住居の観察、川原石を利用しての木の実を磨り潰す体験、石器を作る工程の見学等、いろいろなことを考えてみた。

調査現場では、「聞いて・見て・触れて、歴史体験実感！」をキャッチフレーズに考え、埋蔵文化財から考えられる歴史が地域の中にもどのように密着・浸透していくのかを探るのも目的の一つと考えられよう。



(土井 孝之)

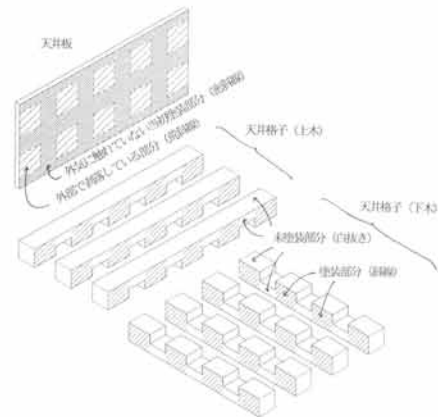
発掘体験学習

粉河寺大門の塗装について

粉河寺大門は宝永4年（1707）の建立である。現在では素木の様に見えるが、見え隠れや軒下部分など風雨の当たりにくい箇所では、赤色の塗装が確認できた。

解体作業が進むにつれて明らかになった塗装の状況は、以下の通りである。

- ① 屋根土居葺きの上面に、赤色塗料が落ちていた。特に妻飾りのあたりに多く落ちており、土居葺きまで施工の進んだ時期に塗装したと考えられる。
- ② 瓦座までいったんすべて赤色で塗り上げ、その後瓦座前面のみ墨塗りにしている。建立当時は、1階柱より軒廻りに至るまで、赤色一色で塗り上げられていた。
- ③ 刷毛目、液だれの痕跡がよく確認できた。このことから、かなり手早く、1回仕上げであったかと推察できた。
- ④ 部材の組手部分は白いままで塗装の跡が見られず、部材組上げ後に塗装したと考えられた。1・2階天井の化粧板のみは、塗装後に天井格子に打ち付けていた。



天井格子の塗装状況（模式図）

以上のことから建立当初から塗装されていたことは確実で、今回の修理に当たり塗装を復元することとなった。復元に当たり以下のことを検討した。

- I. 顔料の特定 — 部材より掻き落とした当初顔料と、現在流通している顔料（弁柄＝ベンガラ、丹土＝につち）の成分を分析検討した（表1. 和歌山県工業技術センター調べ）。
- II. 溶剤の特定 — 膠か柿渋であることが予想されるが、いずれかに特定出来るか否か分析検討した（表2. 和歌山県工業技術センター調べ）。
- III. 色彩の特定 — 外部に残る塗装は黒ずんだ赤暗色に見えたが、天井板の見え隠れなど外気に触れない箇所では黄味がかった赤褐色であった。I. で特定された顔料を用い、塗り上がり（乾燥後）が当初の塗装と同じマンセル値となるよう、材料の調合を試みた。

当初顔料の分析は、当初材より掻き落とした粉体試料と、天井格子（椀材）を水浸したときに得られた液体試料を用いた。また当初顔料は、弁柄（鉄が主成分）の系統であることが予想され

試料	成分比(%)	Fe	Si	Al	その他
1. 当初試料（粉体）		49.75	21.98	10.35	9種 17.92
2. 当初試料（液体）		25.26	65.17	—	13種 9.54
3. 弁柄（現在のもの）		96.	2.4	0.53	4種 1.07
4. 丹土（現在のもの）		55.	12.	19.	17種 14.

表1 各試料の分析

試料	項目	全窒素量 (g/100g)
1. 当初試料（粉体）		1.63
2. 同上（液体を粉末化）		1.38
3. 柿渋		0.02
4. 膠		15.50

表2 全窒素量の測定

たので、比較試料として現在流通している弁柄と丹土を用いた。分析の結果から、当初顔料の成分はFe・Si・Alが目立つが、Si・Alは土埃の類なので、Feが主体の顔料であることが分かる（表1）。

溶剤については、動物性タンパク質が窒素に変化する特性から、動物性の膠か、植物性の柿渋かが特定できると考えた（表2）。当初試料に窒素が含まれることから、溶剤は膠と判断した。

以上の分析結果を踏まえ、色彩の検討を行った。Feつまり鉄分主体の顔料といえ一般には“弁柄塗り”をさし、その意味では当初の塗装も、弁柄も丹土も“弁柄塗り”であるが、発色には相当な違いがあった。手板を作成しマンセル値を比較したところ、弁柄は8.0R4.5/4.5（色名：小豆色）、丹土は10R4/7（同レンガ色）、天井板の見え隠れに残る当初塗装部分は7.5R5/8（同潤朱＝うるみしゅ）であった。「文化財建造物修理用資材需要等実体調査報告書（4・顔料）」〈1987、文化庁〉によれば、明治期の弁柄はマンセル値で10R3/6、現在市販されている弁柄は8.0R3.5/8.5-3.5/7である。明治期の弁柄が、現在の弁柄よりも、土埃や不純物の多い丹土に近い色味を示しているのは、発色の違いが、成分比の違いに起因するであろう。現在の弁柄は、Feの純度が高く、その他微量成分の種類と含有量が極端に少ない。同書に化学反応で合成した弁柄の製造が大正時代に始まったとあるから、その影響と考えられる。

つまり一概に“弁柄塗り”であると言っても、現在の弁柄をそのまま塗装するだけでは、正しい色彩の復元にはならない、ということである。こうした復元に関わる顔料の選択には、なにが検出されたかだけでなく、各成分の含有量や、発色の度合いまで含めての判断が必要である。

今回の塗装では、弁柄と丹土を比率を替えて配合した色見本の手板を7種類作成し、当初色彩に一番近いものを選択した。最終的に弁柄20：丹土80の比率に決定した。溶剤は四匁膠液（水180cc：三千本膠15g）である。

（鈴木 徳子）



塗料の製作1 弁柄と丹土を混合する



塗料の製作2 顔料と膠液を良く練り込む



塗料の製作3 練り合わせた塗料を濾す

湯浅の町屋について

湯浅町湯浅において、県内では初となる伝統的建造物群保存対策調査が実施された。和歌山の古建築と言えば社寺のイメージが強いが、歴史的な町並みや景観も豊富に残されている。湯浅もそのひとつで、醤油・味噌の醸造業で栄えた商業都市としての雰囲気は今に伝えている。昔ながらの町屋が軒を連ねる姿は、今後の町づくりに上手に生かしていくことが望まれる。今回の調査で、文化財センターは町屋の個別調査を担当した。ここでは湯浅の町屋建築の特徴について、その概要を述べてみたい。

湯浅の町屋は、切妻造・平入の主屋を、通りに面して敷地いっぱい建てるのが一般的な形式である。これ以外の形式はほとんど見られず、結果、まとまりのある町並みを形成している。

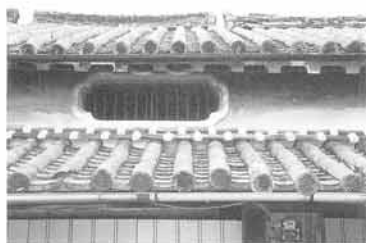
屋根は本瓦葺の占める割合が高く、棧瓦の普及は比較的遅かったようである。表構えを見ると、片引大戸に各種の格子で構成され、摺り上げ戸や蔀戸、揚げ床几などは一切見られない。2階は大壁とし、虫籠窓や木格子の窓をあける。時代が下がるとガラス窓、鉄格子なども現れる。外観における装飾的要素は少なく、簡素な印象が強い。

平面的には片側にトオリニワを持つ形式がほとんどだが、前面に大きく土間を持つ形も見られる。床上部は1列2室か2列2室を基本とし、梁間（奥行）規模は大きくない。背面側に角屋あるいは下屋を付して居住空間を拡大する例や、上手に座敷を増築する例が多い。

2階は正面側に設け、背面側のトオリニワとそれに面するガイドコロの上部は吹き抜けとし、屋根を支える架構がそのまま見える。ガイドコロの土間境には建具も入れず、非常に広々とした空間を形成しており、湯浅の町屋の最も特徴的な部分である。

構造を見ると、一般的な小屋組は次の通りである。すなわち妻および部屋境に水平梁を架け、これに地棟を通す。地棟上に束を立てて棟木を支持する。部屋上部では正背面から登り梁を架け渡し、地棟上に立つ棟束にホゾ差し鼻栓止めとする。登り梁上に直接あるいは束立てして母屋桁をのせ、垂木を配する。梁と桁の組み方は、京呂もあるが折置が多い。時代が下がっても折置はよく用いられる。

以上が湯浅の町屋の基本形式である。次に主な遺構を見ていきたい。



本瓦葺に虫籠窓



トオリニワ見上げ



小屋組

北村家（大三、玉井醬本舗）

江戸期に遡る遺構で、湯浅では最も古い町屋のひとつと考えられる。建ちの低いつし2階で、本瓦葺とし、2階には虫籠窓をあける。平面は2列2室型とし、背面側には古めかしい角座敷が突出する。有力商家の古い遺構として極めて貴重である。



正面外観



角座敷外観



角座敷内部

栖原家

明治7年の建立と伝えられる。醤油醸造業を営む商家に特有のツメバと称する土間空間を、トオリニワの下手に備える点に特徴がある。やや建ちの高くなる点や、虫籠窓と同時に木格子の窓を多用し幾分軽やかな印象を受ける点などが、それ以前の町屋と異なるところであろう。外観・内部ともに改造が少なく保存状態も良好で、湯浅の町屋建築を代表する存在と言える。



正面外観



トオリニワ見上げ



座敷

金谷商店倉庫（右棟）

上棟札が発見され、大正3年建立が判明した。本来は倉庫でなく、金谷商店の主屋として建てられたものである。建ちが随分高くなり、大きなガラス窓を設けるなど、2階も居住空間として十分な天井高と明るさを得ている。明治末頃から大正にかけて湯浅の町屋は大きく変化するが、その新しい形を取り入れた事例として注目される。（川戸 章寛）



正面外観



2階居室



同左天井

橋本における町家の編年指標について (3)

和歌山県域民家の編年指標作成のための基礎的調査研究 その3

はじめに

民家史研究の編年作業は、建築年代が不明でありながら相応に古い遺構をどう位置づけるかが主要な目的であったといえるだろう。この作業を根幹にして民家史が体系付けられてきた。しかし近年の庶民住宅史研究を取り巻く状況や、文化財指定の動向からみてもその対象領域は拡大しており、特に近代での研究が著しく進展している。近代は時代からみれば未だそれほどの時間が経過しておらず、そのためか近代の町家建築の編年研究はそれほど進んでいない。

ここでは以上の状況をふまえ、筆者が長岡造形大学と共同して調査をおこなっている、橋本市中心市街地に現存する近代の町家建築の編年指標をかいつまんで報告する。

近代町家建築の編年指標抄

□ 建具類—特に襖について

襖は麻糸を張り付けたベージュ色のものを良く目にすることができる。框は漆塗りである。これは大正から昭和初期にかけて造られた襖のようで、この期に建築された町家や離れ座敷などで使われるが、比較的富裕な造りの座敷に多く用いられており、高価なものであったらしい。

襖の下貼から反古にした文書が出ることが多いが、近代の町家の場合、新聞が使われることがある。表具師によれば新聞は下張りに適さず、和紙がもっとも良いという。把握した遺構数は少ないが、長屋（借家）などの襖に新聞が用いられる場合が多い。下貼の新聞の年月と棟札がほぼ一致した例もあり、建築年代を類推する有効な資料となることがある。

□ 座敷の造作

近世では床の間を備えた書院座敷は、室列が二列以上の町家に限られていたが、近代になると長屋にいたるまで床の間を設けるようになる。この期には主屋を二階建てで造り、二階座敷を設ける例が増える。この場合、二階座敷のほうが一階よりも上格に位置づけられる。

大正、昭和初期には造作材に非常な良材を使う。目の詰んだ柾目の長押や天井板などである。同時にこれまで濃茶色に色づけするのが通例であった木部を素木で見せるようになる。



大正2年建築の町家



昭和初期建築の離れ座敷

□ 軒の造り

主屋の場合、塗り籠めが普通であった正面軒は、明治後期ころより塗り込めをやめて木部を見せるようになる。同時に腕木を用いたせがい造りの例が増え、繊細さ軽快さが強調される傾向がある。大阪では明治42年（1909）の大阪府建築取締規則によって、慣行であった町場の塗り籠造りの真壁化が許されているが、このことは橋本にも何らかの影響を及ぼしたかも知れない。

棧瓦葺きの軒先に一文字瓦を使う例も明治後期頃より出てくる。縁側の軒は化粧小舞とし数寄屋風のおもむきを持つ。鬼瓦は鬼面と鳥衾の組み合わせが衰退し、影盛付の鬼を載せる。

□ 機械製材

近代化の中で製材は機械化され飛躍的に効率が高まる。機械製材のトップを切ったのは丸鋸で、江戸末期には日本に入ってきている。水力、蒸気から電力へと変わったが、明治前期にはすでに全国で使われた。明治30年頃に帯鋸が導入され、明治末から大正期には国産機が普及する。

橋本の町家で帯鋸の初見は大正末期建築の離れ座敷である。床板や天井板に帯鋸の加工痕が見える。昭和初期建築の町家では野物材はほとんどが帯鋸挽きとなり、鉾や手挽鋸の痕跡は見られなくなる。丸鋸の初見については、もう少し調査が必要である。

□ 洋釘

明治初期にこれまでの和釘（角釘）に代わり、洋釘（丸釘）が輸入される。鍛冶屋が一本ずつ鍛錬していた和釘に比べ、圧倒的なコスト差で明治20年頃には和釘にとって代わった。

橋本では明治17年（1884）建築の町家で和釘と洋釘が併用されており、この期がちょうど過渡期であったことがわかる。ちなみに棟札には洋釘が用いられており、階段裏板や床板などむしろ目立たないところに和釘を使っていた。明治33年（1900）に吉野から橋本に移築された教会堂（吉野時代は農家の主屋）は、洋釘で棟札が打たれていた。

おわりに

以上でかいつまんで町家の編年指標について述べた。もちろんこれだけではなく、調査者の見方によって多様な指標があるものと考えられる。近代ならではの膨大な資料をどう使いこなすか、また法制度や流通制度の関係解明等々課題は多いが、この作業は近代町家の位置づけのみならず江戸期町家の改造過程の評価にも繋がるものと予測できる。（御船 達雄）

左：帯鋸挽きの小屋組
昭和10年建築
右：帯鋸機械
かつらぎ町内にて



窪・萩原遺跡（栲田荘）の発掘調査

調査経緯 窪・萩原遺跡（栲田荘）は紀ノ川中流北岸の伊都郡かつらぎ町窪・萩原に位置している。当遺跡は京都神護寺領の中世荘園であった栲田荘の中に所在する。

平成8年度に下水処理場建設に伴う試掘調査により旧紀ノ川の石積み護岸跡が発見され、平成9年度から10年度にかけて5次の調査が実施され、大規模な護岸や石堤が確認されている。今回の調査地点は栲田荘の南西部に位置し、窪谷川と旧紀ノ川の合流地点にあたる。試掘調査で確認された護岸1と工事中に発見された護岸2の石積みを検出するために調査を実施した。

護岸1 護岸1はほぼ東西方向に延びており、法面には下段に長さ40～70cm大の結晶片岩の板石が10～12段平積みされ、上段には人頭大の川原石が伍の目状に12～14段小口積みされている。基底部から最上段の石積みの上端部までは約2.7mを測る。トレンチ1の断面観察から、底部裾部には直径10cm程度の胴木を横に敷いて杭で固定している。裏込め石は基底部に10～20cmの川原石が認められるが、それ以外は顕著でない。裾部から外側の平坦部にも結晶片岩の板石が隙間無く敷かれている。築造時期に関しては、地元の話では、昭和後期に造られたという。石積みの間から縄文時代の石鏃が1点出土した。



護岸1（東から）



護岸2（南から）

護岸2 護岸2は東南東から西北西に延びており、旧紀ノ川と窪谷川の合流部だと考えられる。3段に構築されており、各段の間には、幅約50cmの横方向の目地が通っている。

長さ40～60cm前後の台形の結晶片岩を小口面を上にして、楔状に打ち込むように並べている。上流からの水の抵抗に備えるためか70～80°前後の角度で斜めになっている部分が多い。上端部と下端部は結晶片岩を1列横積みになっている。裾部から外側には20～30cm程の川原石がまばらに置かれている。中央部から西部にかけて上段の石積みは、破壊されている。トレンチ2の断面から、長さ20～60cm程の結晶片岩の裏込石が、表面から1m程の厚さまで充填されていることが確認された。

護岸は東部では斜面長約6.5mであるが、西部にかけて幅が狭くなっており、勾配も急

角度になっている。石材は結晶片岩類で、多い順に緑色片岩類、黒色片岩類、砂質片岩類、石英質片岩類である。各石材はまとめて使用される傾向がみられ、東部の上から1・2段目には緑色片岩類が多く、西部の1段目には黒色片岩類が多く、東部の3段目には砂質片岩類が多くみられる。石積みの約20cm上の堆積土から18世紀後半と考えられる伊万里の碗の破片が出土した。

まとめ 今回の調査結果と過去の調査成果とを比較検討してみたい。第1次調査区と第4・5次調査区で一連のものと考えられる江戸時代初期の石積み護岸がそれぞれ135mと85m確認されている。この護岸は3段構成で、各段の間には幅50～60cmの目地が通っている。高さは約1m・幅約6mで緩やかな勾配である。10～20cmほどの河原石と30～50cmほどの結晶片岩が使用されている。この護岸と今回の護岸2は構築技法や規模の点で類似している。ただし、石材の組み方や使用法が異なっている。第1次調査区の護岸では目地の部分に河原石が使用されているし、石材も平積みにした部分もみられる。全体的に護岸2の方が目地が詰まっており、構造物としてより進化した形状を呈している。

第3次の広域試掘調査では、今回の調査地点から東に約100mと200mの2ヶ所のトレンチで19世紀前半～中頃の巨大な石積み護岸と石堤が確認されている。しかしながら、それらの延長と考えられる構造物は確認出来なかった。

過去の6次にわたる発掘調査で、江戸時代初期から昭和にかけての多種多様な石積み護岸が検出された。このことは周辺地域が絶えず紀ノ川氾濫の危険性にさらされていたことを物語っている。その原因は地形をみれば明らかで、少し下流で、北は背ノ山・南は妹山が紀ノ川にせり出して流路が狭まっている。しかも中洲には船岡山という島が存在して、水流を堰き止めるようになっている。そのため、調査地周辺では洪水が頻繁に起こっていたものと考えられる。水害から田畑や道路を守るために築堤作業に心血が注がれたのであろう。

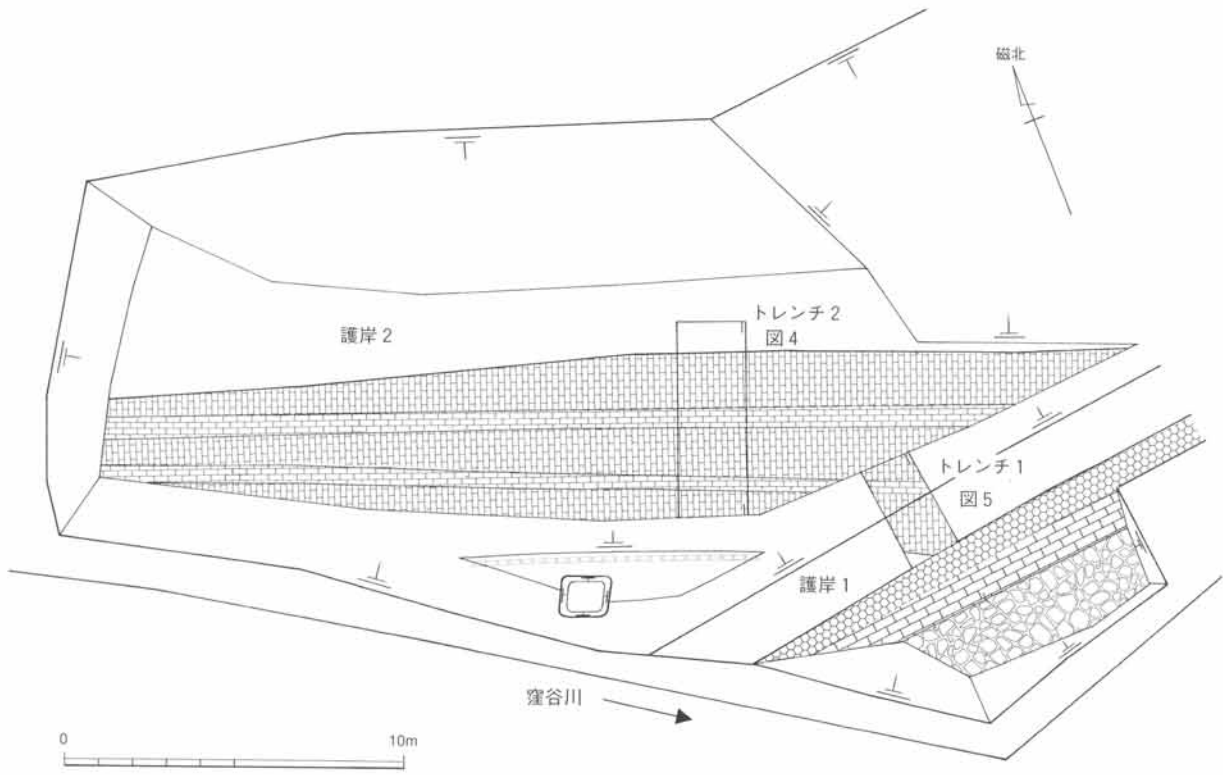
(黒石 哲夫)



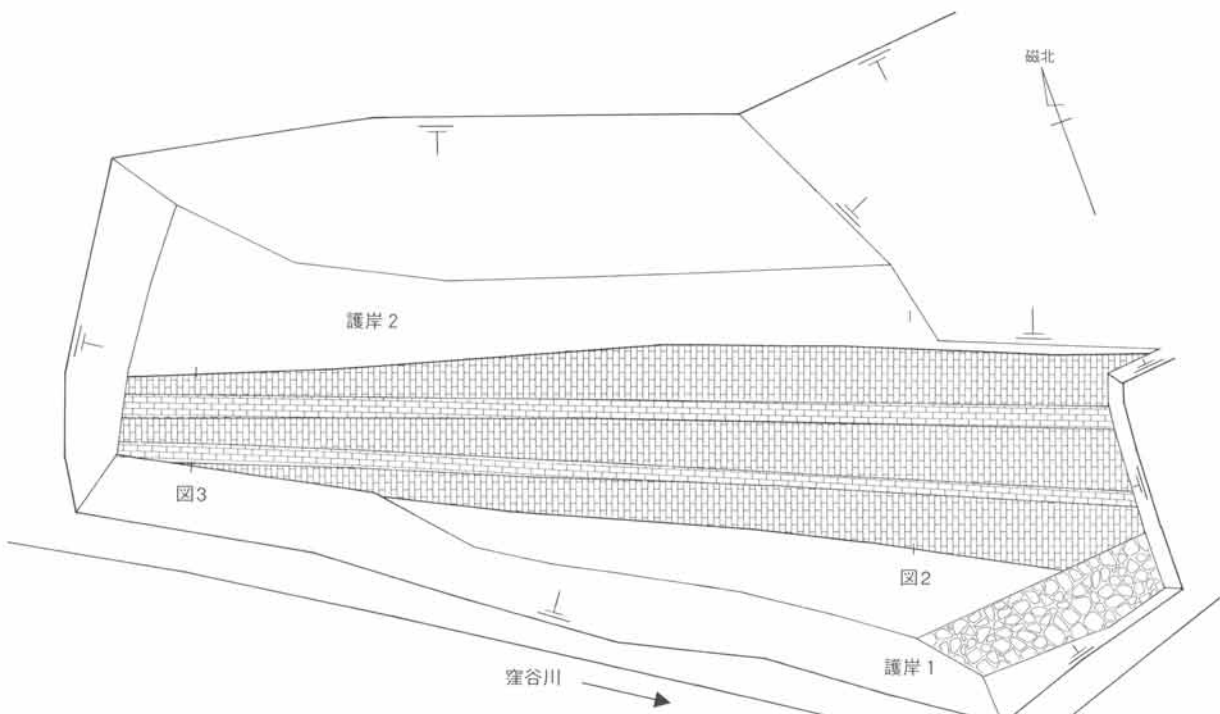
護岸1 トレンチ1 土層



護岸2 トレンチ2 土層



上面遺構配置図



下面遺構配置図

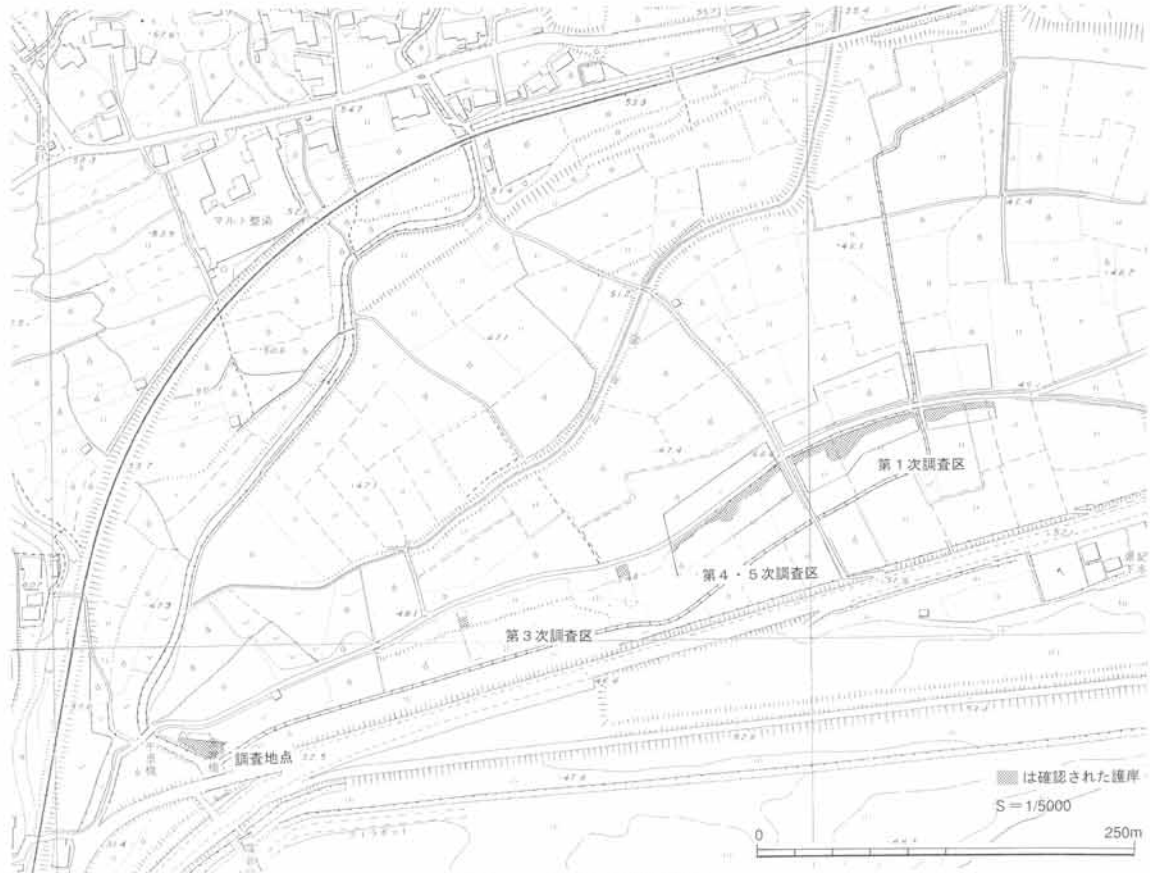


図1 調査地点位置図

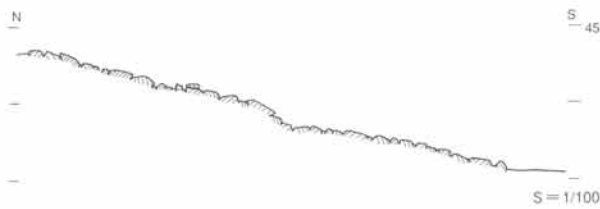


図2 護岸2 東部断面図



図3 護岸2 西部断面図

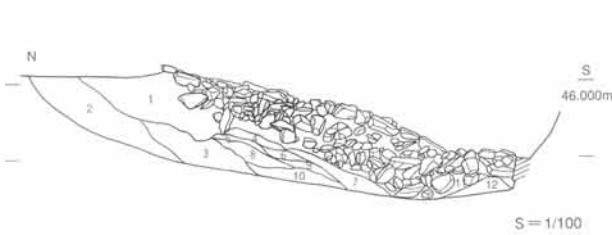


図4 護岸2 トレンチ2 東壁土層図

- 1 2.5 Y 5 / 4 黄褐色弱粘質土
- 2 2.5 Y 6 / 2 灰黄色細砂
- 3 2.5 Y 7 / 4 浅黄色粘土
- 4 2.5 Y 7 / 3 浅黄色粘質土凝状に混じる 2.5 Y 6 / 3 にふい黄色細砂
- 5 2.5 Y 6 / 2 灰黄色細砂凝状に混じる 2.5 Y 7 / 3 浅黄色シルト
- 6 10 B G 5 / 1 青灰色粘土
- 7 10 Y 5 / 1 灰色細砂
- 8 10 Y 6 / 1 灰色細砂凝状に混じる 10 Y 7 / 2 灰白色粘土
- 9 N 5 / 0 灰色粘土凝じり 7.5 Y R 6 / 8 褐色細砂
- 10 10 Y 7 / 2 灰白色シルト
- 11 10 Y 7 / 1 灰白色砂礫土
- 12 2.5 Y 6 / 2 灰黄色細砂凝じり 2.5 Y 5 / 4 黄褐色弱粘質土

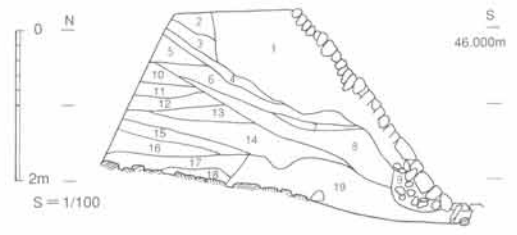


図5 護岸1 トレンチ1 東壁土層図

- 1 7.5 Y 4 / 2 灰オリーブ粘質土凝じり 10 Y 7 / 1 灰白色砂礫土
- 2 10 Y R 6 / 4 にふい黄褐色弱粘質土
- 3 10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色弱粘質土
- 4 10 Y R 6 / 4 にふい黄褐色弱粘質土
- 5 10 Y R 6 / 3 にふい黄褐色弱粘質土
- 6 7.5 Y 4 / 3 暗オリーブ色粘質土凝じり 7.5 Y 6 / 3 シルト
- 7 5 Y 7 / 4 浅黄色シルト
- 8 5 Y 5 / 3 灰オリーブ色粘質土
- 9 10 Y 4 / 2 オリーブ灰色粘土
- 10 7.5 Y R 4 / 3 褐色弱粘質土凝状に混じる 10 Y R 5 / 4 にふい黄褐色シルト
- 11 7.5 Y R 4 / 3 褐色弱粘質土凝状に混じる 10 Y R 5 / 3 にふい黄褐色シルト
- 12 7.5 Y R 4 / 3 褐色弱粘質土凝状に混じる 10 Y R 6 / 4 にふい黄褐色弱粘質土
- 13 7.5 Y R 4 / 3 褐色弱粘質土凝状に混じる 5 Y 5 / 2 灰オリーブ色弱粘質土
- 14 7.5 Y R 4 / 3 褐色弱粘質土凝状に混じる 2.5 Y 6 / 4 にふい黄色弱粘質土
- 15 7.5 Y R 4 / 3 褐色弱粘質土凝状に混じる 2.5 Y 5 / 4 黄褐色弱粘質土
- 16 2.5 Y 4 / 6 オリーブ褐色弱粘質土
- 17 5 B G 6 / 1 青灰色粘土
- 18 5 B G 7 / 1 明青灰色粘土
- 19 7.5 Y 3 / 2 オリーブ灰色砂礫土

海外研修報告 中国

平成12年11月20日(月)から27日(月)まで、全国埋蔵文化財連絡協議会の訪中団の一員として、7泊8日の日程で中華人民共和国を訪問した。訪中団は、全国14埋蔵文化財法人所属の23名の団員からなる、研修案内者として、南京博物館副研究員王根富氏がついた。

今回の中国訪問では、中国中央部東側の江蘇内の遺跡や博物館を訪れた。長江中・下流域を中心とする中国文明の一端に触れ、5000年にも及ぶ歴史の一端に触れた。また、現代中国、上海市・南京市などの大都市、さらに中小都市など、行く場所行く場所で道路の開発、ビルの建設が行われ、国自体が動いている・人も動いているのを肌で感じた。都市部での車のラッシュ、百貨店の品数の多さ・豪華さ、物乞いの存在、農村部のゴミの多さ、トイレの驚き、ビールの安さ、物価の安さなど、大きな動きは、政治と経済が分離する中で、広大な土地と人民の動き、21世紀中国がどのような国になるのかも考えさせた。

揚州市は、古代から南北を結ぶ交通の要衝であり、隋代には揚州城という隋の南方支配の拠点が置かれた場所である。隋第二代皇帝煬帝の墓はここにある。遣唐使・遣隋使の船は、揚州を最初の上陸地とした。鑑真上人もここ揚州から日本を目指した。**甘泉2号墓** 揚州市北西約10kmにある農村・甘泉地区には東漢(後漢)期の墳墓が多数存在する。2号墓(1世紀)は広陵王の夫婦合葬墓で、志賀島出土の金印と同字体の金印が出土した事で知られる。被葬者の王は、光武帝の子で西暦58年に死去しており、日本で出土した金印は、西暦57年に光武帝から賜ったものであることから本物である事が確実にされた。**煬帝陵** 煬帝は、現代も使われている南北を結ぶ全長2700kmの京杭大運河(北京～徐州間)を建設した。煬帝陵は、文献資料を根拠にしてほぼ間違いないとされ、昨年10月、揚州市の観光の目玉として修復された。**天山漢墓** 紀元前1世紀、漢代の壮大な地下宮殿、天山漢墓。揚州市北西20kmの天山地区にある神居山にあったもので、1979年に緊急調査し、揚州市内に墓室を移築したものである。墓は1～4号までである。1号が西漢晩期の広陵王の墓、2号が王妃の墓、3・4号が陪葬墓である。木造構造の墓で、南北14m、東西11m、高さ5mである。中国南部で取れる貴重な楠木(日本の楠木とは違う)が使用され、800点を越える部材は、組み合わせを考慮して加工されている。多くの玉製品や副葬品も発見されている。この墓の構造や規模について、実際にみて感嘆した。**朱然墓** 安徽省馬鞍市に朱然墓はある。三国時代の呉の大將軍朱然(182～249)は、孫権の右腕として活躍した名将で、死んだときには、孫権自ら盛大な葬儀を行ったと伝えられる。三国時代の典型的な墓とされ、現地で保存されている。方形の封土の墓室は、磚室墓で、天井部はアーチ状に積み上げた門、前室、后室がある。后室に楠木の太木をくり貫いた漆塗りの木棺が置かれていた。盗掘を受けているが、木器・漆木器・銅銭6000枚が出土した。現在の名刺にあたる木刺・木濁が出土した。木刺は、私的

な交際に使われ、木湯は公的な交際に使われる。後者は官職名も記載される。木刺には、「朱然」の墨書が、木湯には「右將軍大師司馬」の官職名が残り、被葬者が朱然であることが判明した。漆器類も出土しており、描かれた絵画は当時の王や王侯の生活の一端が判明する資料である。

南唐二陵 南京市郊外の南唐二陵は、史跡公園として整備され、墓室の見学が可能であった。二陵が所在する**南京市**は、人口239万人大都市、揚子江中流域、江蘇省の経済文化の中心都市である。南唐（923～960年）は、五大十国の小国家である。わずか三代で滅んだが、先祖欽陵・中祖順陵二代の墓が東西に並んで現存する。自然の山を利用した真南に開口する横穴墓で、墓室は三室構造の磚室墓である。出土した多数の陶俑は、当時の様子を知る貴重な資料になっている。

南京市博物館 明代の朝天宮跡をそのまま博物館として利用している。玉の多さ。施設は立派である。王根富氏の研究室で、氏自ら調査した江蘇省金壇市**三星遺跡**出土遺物、96～98年の中国10大遺跡に選ばれた遺跡の説明を受ける。三星遺跡は、今から6500～5500年前の遺跡で、住居跡や集落跡が検出されている。27日には実際に現地を見学する。1993～1998年の間、630㎡を調査し、約1000基の土坑墓を確認し、玉・土器・骨角器など4000点の副葬品のほか、多くの人骨が見つかった。墓域の最下層の包含層から多くの炭化米が見つかり、長江下流域の稲作文化の起源となる遺跡と考えられている。出土人骨も弥生人骨と類似しているとされる。多くの精巧な玉製品には驚いた。

徐州市人口150万人。徐州漢大三絶、「画像石墓」「洞室墓」「兵馬俑」全てを見学する。洞室墓の構造である**亀山漢墓**は、山の自然岩石をくり貫いて造る横穴墓である。亀銀印の出土により、紀元前128年～116年の中国第6代楚王夫婦合葬墓である事が判明した。墓は相対して二つ作られ、その作りの丁寧さから、南側は楚王、北側はその王妃の墓とされる。墓の中には、中国思想で魂は死なないと信仰から、夫婦の生前の空間をそのまま作り出し、墓道は、二つに区分され、50数mにも及ぶ長さを持つ。この墓の何よりの特徴は、この羨道部の掘削技術、つまりは測量技術にある。壁面がそろい、真っ直ぐにつくられている。人工的に掘削した跡がきれいに残る。50m以上にも及ぶ長さを、数mmの誤差もなく掘削されているのである。赤外線が一直線に通され、その正確さを表示している。日本の弥生時代に、既にこれだけの測量技術が中国では確立されていたのである。

獅子山漢墓は、岩盤をくり貫いた壮大なスケールの地下宮殿と2000点以上の副葬品が出土した。西漢第3代楚王と推定される。117mにも及ぶ墓道・墓室。高さ17mにも及ぶ垂直にくり貫かれた岩盤。古代の栄華を地下に封じこめ、来世においても地下宮殿において権力を継続しようとした王の世界を目の当りにしたとき、また現実に生前の生活空間の各部屋を、地下に作り出すその思想を見たとき、中国人の考え方の一端に触れた気がした。

徐州博物館は、玉類の製品の多さに驚く。市クラスの博物館としては中国一とのこと。小学生が社会教育の一環として展示ケースの前で同級生に解説しており、中国の博物館活用を見た。

(渋谷 高秀)

(財)和歌山県文化財センター平成12年度概要

I 受託事業

埋蔵文化財発掘調査受託事業	10件	文化財建造物保存修理設計監理事業	9件
埋蔵文化財遺物整理等受託事業	2件		

II 会議等

1 理事会・評議員会等

理事会・評議員会	平成12年5月22日(月)	文化財センター事務局
役員会・評議員会	平成12年6月21日(水)	アバローム紀の国
理事会・評議員会	平成12年11月24日(金)	文化財センター事務局 (新理事長就任 木村 良樹)
理事会・評議員会	平成13年3月23日(金)	アバローム紀の国

2 全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係

(1) 総会	平成12年6月8日～9日	静岡県浜松市
(2) 研修会	平成12年10月5日～6日	山口県山口市
(3) 近畿ブロック会議(第1回)	平成12年5月26日	京都府京都市
近畿ブロック会議(第2回)	平成13年2月16日	大阪府枚方市
(4) 近畿事務担当者会議	平成12年11月24日	滋賀県大津市
(5) 近畿ブロック主担者会議	平成12年7月14日	京都府京都市
近畿ブロック主担者会議	平成13年2月23日	大阪府大阪市
(6) 第1回OA委員会	平成12年6月16日	奈良県奈良市
第2回OA委員会	平成12年10月20日	京都府向日市
第3回OA委員会	平成13年3月16日	和歌山市
(7) 近畿ブロック研修会	平成12年10月13日	京都府長岡京市
(8) 海外研修「中国」	平成12年11月20日～27日	中華人民共和国

3 文化財建造物関係

(1) 建造物保存修理事業監督者会議	平成12年4月17日	東京都
(2) 建造物保存事業幹部技術者研修会	平成12年4月18日	東京都
(3) 建造物保存事業主任技術者研修会	平成12年10月17日～18日	東京都
(4) 建造物保存事業中堅技術者研修会	平成12年6月5日～7日	奈良県奈良市
建造物保存事業中堅技術者研修会	平成12年7月10日～12日	富山県富山市

- (5) 建造物保存事業技術者養成研修会 平成12年9月18日～29日 東京都、神奈川県
建造物保存事業技術者養成研修会 平成12年10月23日～11月2日 京都府、滋賀県
建造物保存事業技術者養成研修会 平成12年11月27日～12月8日
千葉県、茨城県、東京都
建造物保存事業技術者養成研修会 平成13年1月22日～27日 兵庫県、広島県
建造物保存事業技術者養成研修会 平成13年2月26日～3月9日 栃木県、東京都
- (6) 建造物保存修理主任技術者等連絡協議会 平成12年10月16日 東京都

Ⅲ 普及事業

1 速報展

「紀州の歩み」第10回速報展 第3回巡回展 田辺市立歴史民俗資料館
(共催：田辺市教育委員会) 平成12年11月25日～12月27日

2 現地説明会

徳蔵地区遺跡発掘調査 (共催：南部町教育委員会、南部川村教育委員会)

日高郡南部町気佐藤

～南部川村徳蔵 地内

平成12年10月7日(土)

平成13年3月24日(土)

藤倉城跡(川関遺跡)発掘調査

東牟婁郡那智勝浦町川関 地内

平成13年3月10日(土)



▲徳蔵地区遺跡現地説明会



◀藤倉城跡(川関遺跡)現地説明会

3 徳蔵地区遺跡普及活動一覧

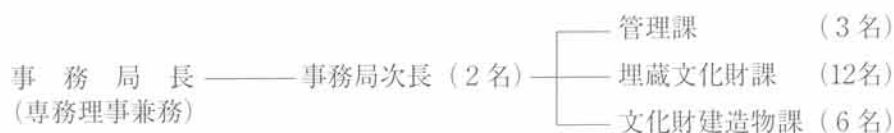
平成12年 8月31日	日本中世史サマーセミナー 徳蔵地区遺跡見学会
9月21日	南部町新庄子供会見学会
9月27日	南部町岩代小学校4～6年生見学会
9月28日	南部町南部小学校アウトドアクラブ発掘体験
9月30日	南部町南部中学校1年生見学会
10月2日	南部町議会全員協議会見学会
10月4日	南部町文化財審議委員会見学会
10月5日	上南部小学校教員見学会
10月7日	徳蔵地区遺跡現地説明会 (弥生時代前期～古墳時代前期初頭集落跡) 共催 南部町教育委員会・南部川村教育委員会
10月13日	南部川村上南部中学校1・2年生見学会
10月24日	南部川村上南部中学校1年生発掘体験
10月26日	南部川村上南部中学校2年生発掘体験
11月9日	岩出町文化財研究会見学会
11月29日	粉河町文化財協会見学会
11月30日	日高地方社会科教育研究会 徳蔵地区遺跡見学会
12月5日	県高等学校社会科研究協会歴史部会 徳蔵地区遺跡見学会
平成13年 1月12日	印南町小中学校教頭会 徳蔵地区遺跡見学会
1月29日	南部文化の会現地説明会
2月14日	南部川村村議会議員見学会
3月19日	南部町町議会議員見学会
3月24日	徳蔵地区遺跡現地説明会 (縄文時代中期前半集落跡) 共催 南部町教育委員会・南部川村教育委員会
3月29日	清川・高木・上南部小学校5～6年生現地説明会
4月10日	田辺市中芳養小学校現地説明会

4 文化財建造物課普及活動一覧

平成12年 7月8日	粉河寺大門修理現場説明会 - 京都大学 (上原真人氏他)
9月9日	粉河寺大門修理現場説明会 - 和歌山県立博物館友の会
10月4日	粉河寺大門修理現場説明会 - 東京芸術大学
10月26日	粉河寺大門修理現場説明会 - 和歌山県文化財保護協会
10月29日	粉河寺大門修理現場説明会 - 和歌山県建築士会
11月3日	紀伊風土記の丘民家説明会
12月16日	粉河寺大門修理現場説明会 - かつらぎ町歴史クラブ

Ⅳ 和歌山県文化財センター組織表

理事長 1名 副理事長 2名 専務理事 1名 理事 7名
 評議員 14名 監事 2名



Ⅴ 職員名簿

事務局長 (専務理事兼務)	田中 嘉一 (6月21日付 専務理事兼務)
事務局次長	吉田 宣夫
事務局次長	畑中 照雄
管理課	主任 西本 悦子
	主事 松尾 克人
	主事 大野由香子
埋蔵文化財課	課長 松田 正昭
	主任 松下 彰
	主任 洪谷 高秀
	主任 土井 孝之
	主査 井石 好裕
	主査 村田 弘
	主査 佐伯 和也
	副主査 黒石 哲夫
	専門調査員 立岡 和人
	専門調査員 三浦 基行
	専門調査員 齋藤 有美
	調査補佐員 山野 晃司
文化財建造物課	課長 鳴海 祥博
	副主査 寺本 就一
	副主査 多井 忠嗣
	技師 鈴木 徳子
	技師 御船 達雄
	技師 川戸 章寛

(財)和歌山県文化財センター年報
2000

2001年6月

編集
発行 財団法人 和歌山県文化財センター

(担当 藤村瑞穂／御船達雄／井石好裕)

印刷 西岡総合印刷株式会社